

《修士論文要旨》

文治年間の運慶の造像と行動の考察

* 中 尾 優 司

論文では文治年間に運慶が制作した興福寺西金堂の釈迦如来像（現在仏頭のみ現存）、願成就院及び浄楽寺の諸像、文治年間の運慶の行動について考察した。

第一章では仏頭について考察した。仏頭は興福寺西金堂に安置されていた釈迦如来像の頭部で、治承四年（一一八〇）の平重衡による南都焼き討ちにより焼失した西金堂の釈迦如来像を運慶が制作した。

この仏頭を対象とした研究は行われてきたが、これを運慶作と伝える確実な史料が不足していた。しかし、横内裕人氏によって発表された「類聚世要抄」には、西金堂釈迦如来像の制作を運慶が行ったことが史料から明らかになった。本稿では最初に「類聚世要抄」に書かれた釈迦如来像の記述を考察した結果、仏頭の作者が運慶であることを確認できた。

次に、現在は京都国立博物館に所蔵されている「興福寺曼荼羅図」に描かれている西金堂の釈迦如来像を考察した。最初に「曼荼羅図」が描かれたのが治承四年以前か以後かを考察した。というのは、毛利久氏は治承四年以前の制作と考察されたが、藤岡稜氏は治承四年以後に制作されたと考察されているからである。考察の結果、図像と興福

寺に安置されている諸像とよく似たものがあつた。そして表現の特色から制作を治承四年以後と位置づけた。次に、西金堂釈迦如来像付属物と伝えられている仏手・化仏・飛天を加えて「曼荼羅図」に描かれた西金堂釈迦如来像とを比較した。その結果、図像とよく似ている部分もあるが、異なつた部分が多いことがわかつた。

仏頭の考察では研究史を始めとして仏頭の概要、作風を考察した。作風では従来の仏頭の写真では頬などが扁平に見え、眼線の線の上がり方がきつく像の印象を損ねていたが、平成二十一年（二〇〇九）に開催された「阿修羅展」の図録の仏頭の写真は従来のものよりも自然に見えるのでこれを使用した。仏頭に見られる古典彫刻の影響についての考察では、仏頭には天平時代から平安前期までの古典彫刻の影響を強く受けていることが判明した。

次に、仏頭と運慶現存作品とを比較した。仏頭は「類聚世要抄」によつて運慶作と判明したが、このことに研究者は慎重である。山本勉氏は水野敬三郎氏が論考に取り上げられた耳の彫り方を取り上げて、仏頭を単純に運慶作だと決めかかつてはいけなさとされた。そこで本稿は仏頭と運慶現存作品の耳を比較した。その結果、確かに仏頭には

運慶現存作品の耳と異なる部分があった。しかし、その違いは大きいとは言えなかった。また、比較した結果、仏頭と運慶現存作品の耳でよく似ている部分も見つけることができた。その結果、耳の彫り方に違いはあるが研究者を懐疑的にさせるような違いはないとした。

最後に、古典彫刻の影響が強い仏頭をなぜ運慶が制作したのかについて考察した。考察の結果、「興福寺」や、「西金堂」という場所、そして、西金堂釈迦如来像を制作した当時の運慶の立場が仏頭を古典彫刻の影響が強いものにさせたという結論に達した。

第二章では願成就院と浄楽寺の諸像について考察した。願成就院は北条時政、浄楽寺は和田義盛によって建立された。

最初に寺院の諸像の安置までの歴史を振り返り、次に願成就院の銘札と諸像を考察した。願成就院では、江戸時代に不動明王像と毘沙門天像から銘札が取り出されており、昭和五十二年（一九七七）には矜羯羅童子像及び制吒迦童子像から銘札が発見された。本稿ではその銘札を考察し、その後願成就院の諸像について考察を行った。浄楽寺でも銘札を先に考察を行い、その後諸像について考察を行っている。次に、両寺院の諸像に見られる古典彫刻の影響について考察を行った。その結果、両寺院の諸像には西金堂仏頭と同様に天平時代から平安時代前期にかけての古典彫刻に見られる様式が両寺院の諸像にも見ることができた。

両寺院の諸像を制作していた当時の運慶の立場の考察では、稲葉伸道氏や永村眞氏の寺院研究から両寺院の銘札に書かれている「勾当

職は興福寺内ではあまり位が高くないことが判明した。つまり、文治年間の運慶は興福寺で職にはついたが、興福寺での位はあまり高くなかったことが想像される。

その後、願成就院と浄楽寺の諸像とを比較した。その結果、願成就院では力強い表現がとも伝わってくるが、浄楽寺ではそれが全体的に少しおとなしくなっていることが判明した。では、この違いを生んだのはどうしてかということをおの章で考察した。その結果、本稿では違いを生んだのは両寺院の願主によるものとした。理由としては貴族の世から武士の世へと変わっていくことを運慶はしっかりとらえていた。そのためには、願主が制作してほしいという仏像を運慶はしっかりとこたえたために両寺院に違いを生んだとした。

最後に、両願主の造仏の意義を考察した。すると、北条時政と和田義盛が運慶に制作を依頼したのは政治的要因もあったのではないかとした。それは、正系の成朝を源頼朝が呼び寄せて勝長寿院の造仏を成朝にさせているからである。つまり、頼朝までは力が及ばない彼等は奈良仏師の流れを汲む運慶に仏像制作を依頼したと考察した。また、運慶の父の康慶は南円堂の不空羅索観音像の制作に忙しく、そのことも運慶に仏像依頼が来た理由だと考察した。

第三章は文治年間の運慶の行動について考察した。現在、研究者を悩ませているものとして、運慶が願成就院及び浄楽寺の諸像をどこで制作したのかという問題がある。現在、研究者は東国へ下向して両寺院の仏像制作を行ったとする下向説と、下向せずに制作を行ったとす

る非下向説の二つの説を提唱されている。また、この問題は現在でも決着がついていない。これにより、本稿ではこの問題について考察を行った。

まず、研究史を見ていくことにした。すると、昭和三十四年（一九五九）以降にこの問題を取り上げた論考が増加することに気付いた。理由は、浄楽寺毘沙門天像の調査によって浄楽寺の諸像が運慶作と考えられるようになったからである。まとめると、下向説の立場に立たれた論考が多く、非下向説の論考は少なかつた。つまり、研究者の多くは下向して制作したと考えられている。本稿は研究者の多い下向説でなく、非下向説で考察を行った。

最初に源豊宗氏や毛利久氏が考察された成朝が携わった勝長寿院に運慶が共に下向したという説を否定した。というのは、『類聚世要抄』の西金堂釈迦如来像の記述によって文治二年（一一八六）に運慶は興福寺にいたが、文治元年に成朝は東国に下向していることから、この時は運慶は西金堂釈迦如来像の制作中と考えられるので、成朝と共に下向していないとした。

次に、銘札に見える不審点から執筆場所を考察した。なぜなら銘札には気になる場所があるからである。例えば、願成就院の銘札には北条時政に「朝臣」が書かれているが、朝臣を書ける五位以上に時政がなったのは正治元年（一一〇〇）で、制作が開始された文治二年は正治元年よりも前であるためにこの時に「朝臣」が書かれているのはおかしい。また、願成就院では日付の後に制作したと書かれているが、

浄楽寺の銘札では日付の後に制作が始まったのか、もしくは完成したのか書かれていない。ということは、東国で制作したのならば願主が気付いて訂正するはずである。しかし、それが銘札からは見えてこない。これらの結果から、東国で運慶が両寺院の諸像の制作を行っていないとした。

次に、運慶は文治二年に内山永久寺の正願院で三尺の弥勒像を開眼供養を行ったことが『内山永久寺置文』に書かれているが、ここで信円が登場している。信円は興福寺と深く繋がっている僧で、その僧が書いた御曆記に運慶が登場している。根立研介氏は興福寺といった場所に関わる造仏と考えられ、運慶の造像活動の基盤を考えさせる事績として改めて評価すべきだと考察されているが、本稿ではこの考察に賛成で、本稿では、文治二年に運慶は東国で仏像を制作していないと考察した。

次に美術的観点から下向説を否定した。願成就院と浄楽寺の諸像には古典彫刻の影響が見られるが、東国では古典彫刻が多くあるのかを考察した。すると、東国では天平時代から平安時代前期にかけての古典彫刻は少なかつた。ここから、運慶が東国で制作したならば古典彫刻がよく見られる仏像は完成できないと考え、美術的観点からも東国で制作したというのはおかしいことがわかった。以上により、最終的に史料の観点と美術的観点から運慶は東国へ下向せずに願成就院と浄楽寺の諸像を制作したという結果が得られた。